理工科学校の残照
――スタンダールの小説世界におけるポリテクニシアン

柏　木　　治

（一）理工科学校の影

スタンダールと理工科学校（エコール・ポリテクニーク）の関係は両義的である。『アンリ・ブリュラールの生涯』（以下『ブリュラール』）によれば、少年アンリは生まれ故郷グルノーブルを脱出するために数学を真剣に勉強した。「本物であれ偽物であれ、数学がわたしをグルノーブルから脱出させてくれるだろう、吐気をもよおさせるこの汚泥から。[1]」フランソワ・ミシェルによれば、もともと頭抜けて優秀だったわけでもなかったようだが、[2]ガブリエル・グロの個人授業の機を得て中央学校での数学の成績は飛躍的に伸び、他の数名とともに一等賞を獲得、この結果をもってパリでの理工科学校受験資格となった。ところが実際にパリに到着するや、数学とパリへの情熱は一気にしぼんでしまう。このあたりの経緯はスタンダールの読者にはよく知られていることだが、いま一度自伝で確認するならば以下のとおりである。

今日とてもはっきりと見え、そして一七九九年にはきわめて漠然と感じていたことは、パリに到着すると、あ

れほど変わらず熱情的に求めていた二つの大きな欲望の対象が急に何でもないものになってしまったことだ。それまでわたしはパリと数学を熱愛していた。山のないパリはわたしにとても深い嫌悪を抱かせ、それが郷愁の気持ちにまでなった。数学は、前日の祝火の足場のようなものでしかなくなったのである〔中略〕。

実のところ、私がパリを愛したのは、グルノーブルを深く嫌っていたからなのだ[3]。

結局、かれは理工科学校を受験しないと決意する。同じく一等賞をとった同郷の級友がみな受験し合格したのであったが、かれ自身はすでに数学が嫌にさえなっていた。グルノーブルから出るという目的のための数学は、その目的を果たすと同時に役目を終えたというべきか。とはいえ、この記述の直後に、三七年後のいま（『ブリュラール』を書いているいま）の感想として、「父がもう少し注意深かったら、この試験を受けさせていただろう」、さらに「どうして父が試験をうけさせるようにしなかったのかがわからない[4]」と書き記しているところからすれば、理工科学校生にならなかったことに一抹の後悔がよぎる瞬間があったのかもしれない。みずから選択した決定であるはずなのに、結果を父の配慮不足に転嫁しているかのようにもみえるからである。入学していたら「もうパリで喜劇を書きながら生活することができなくなっていただろう[5]」という文章さえ、多少とも恨めしさの混じった逆説的な自己慰安の感情に読める。

理工科学校への言及は、自伝のなかの受験時の回想にとどまらず、三〇年ものちに書かれる小説作品の登場人物のなかに残照ともいうべきかたちで再びあらわれてくる。そしてそれが両義的にみえるのは、理工科学校生であった主人公たちが（卒業生であれ、中途退学者であれ）、スタンダールのありえたかもしれない現実を幾分なりとも仮託されているかに思われる一方、理工科学校生という経歴が積極的に肯定されるわけでもないからである。他方、一九世

紀前半において理工科学校の存在は、ある特殊な社会的・政治的な意味を帯びており、とくにスタンダールが描いた小説の背景となった時代、すなわち一八二〇年代から三〇年代においてそれは思想的にも両義的であった。後者の点についてはあとで立ち入って論じることにして、まずは小説の登場人物を眺めてみよう。

（二）小説のなかの理工科学校

理工科学校の存在は、さきに述べたとおり、他の学校と較べていささか特異な意味をもっていたがゆえに、小説のなかに組み込まれることも少なくなかった。たとえば、スタンダールと同時代に小説を多く発表したバルザックをみても、王政復古期に新しい未来を切り開こうとする青年主人公を理工科学校卒業生にしたてた『ヴァン＝クロール』（一八二五）[6]、理工科学校生の肩書をつかって身分を隠す王党派の若き将軍モントーラン侯爵の登場する『ふくろう党』（一八二九）[7]などが思い浮かぶ。そして『絶対の探求』（一八三四）には、この王政復古時代の理工科学校をよく表現している文章がある。ジョゼフィーヌの死後、娘のマルグリットは息子ガブリエルを理工科学校に入れる決意をするのだが、その際、復習教師エマニュエルは学校についてつぎのようにいう。「あの学校をりっぱに卒業した者はどこでも歓迎されます。これまでに行政官、外交官、学者、技師、将軍、航海士、司法官、工場主、銀行家があの学校から出ています。ですから、金持ちの青年、あるいは良家の青年が、あそこへ入学する目的で勉強しているのは、ちっとも不思議なことではないのです。[8]」

このように、王政復古の時代にはいっても理工科学校はもっとも栄光にみちた教育機関であり、異彩を放っていたというべきだろう。ところがこのバルザック自身、『村の司祭』（一八三九）において理工科学校出身者であるグレゴワール・ジェラールに「ああ、自分の将来が目に焼き付いて見える。主任技師は六〇歳で、自分と同じく立派にあの

有名な学校の出だ。かれはわたしがやっているのと同じことを二つの県でやって年功を積んできたが、想像の限りもっとも平凡な人間になっている。かつて昇った栄光の高みから再び落ちたのだ〔以下略〕[9]」と言わせている。この小説の時代背景は七月王政期だが、少なくともここに登場する人物をとおしてバルザックは理工科学校に期待を寄せているとは思えない。実際、ジェラールは知識と行動の人として描かれているものの、かれの主張そのものは作者によって最終的に否定されているかにみえる。

このように、バルザックの描く理工科学校には明と暗が示されているといえようが、この二面性は、一度は理工科学校への進学を意図したスタンダールにおいてもみてとれる。この学校に在学経験のある人物は、『アルマンス』のオクターヴ・ド・マリヴェール、『リュシアン・ルーヴェン』のリュシアン、同じ小説に登場するコフ、さらに『薔薇色と緑色』のナポレオン・マラン＝ラ＝リヴォワール、そして『ラミエル』のフェドール・ド・ミオサンスであるが、ここでは『アルマンス』の主人公オクターヴと『リュシアン・ルーヴェン』のリュシアンに照準を定めて作品中の理工科学校の意味を考えたい。

a．オクターヴ・ド・マリヴェール

まず『アルマンス』の主人公については、冒頭、以下のように書き始められている。

二〇歳になるかならないかのオクターヴは、理工科学校を出たばかりであった。父マリヴェール公爵はただ一人の息子をパリに留めおきたかった。尊敬する父と一種熱愛する母がいつもそれを望んでいるのをひとたび確信すると、かれは歩兵隊に入るのを諦めた。連隊で何年か過ごしてのち、はじめての戦いの前に辞めてもよかった

のだ。戦うのに中尉としてであれ大佐の位であれ、そんなことはかなりどうでもよいことであった。[10]

理工科学校を卒業したものは通常、軍に属するのが一般的であった。この学校の著しい特徴として、長いあいだナポレオンの栄光に結びつけられてきたという事実がある。フランス革命下、旧体制時代の王立学校が閉鎖されるにともない、あらたな教育制度が構想されるが、理工科学校の前身である中央公共事業学校（École centrale des travaux publics）も、その校長となるジャック＝エリ・ランブラルディの発議のもと、ガスパール・モンジュやラザール・カルノらの賛同を得て、一七九四年九月、国民公会によって創設された。翌年「エコール・ポリテクニーク」と改称され、[11]技術者養成の中心的教育機関として発展していくことになるが、ナポレオン体制とともに内務省から陸軍省直轄へと移されるにおよんで軍事的色彩を強めることになった。「祖国と諸科学と栄光のために」（Pour la Patrie, les Sciences et la Gloire）という、いまに残るこの学校の標語はナポレオンによって与えられたものである。

王政復古とともに一時閉鎖されるも、すぐに再開され、以後一九世紀を通じて共和国精神と祖国愛、進歩と科学主義を体現する軍事的テクノクラートの養成機関というイメージが植えつけられた。[12]のちにフローベールは『紋切型辞典』（一八八〇）の「学校」の項で、「理工科学校。どんなブルジョワも息子を向かわせようとする最高の目標。すべての母親の夢【古風】。暴動で理工科学校が労働者に共鳴すると知ればブルジョワの恐怖【古風】。《学校（エコール）》というだけでそこにいたと思い込ませる。〔以下略〕[13]」と書くことになるが、これらの言葉は一九世紀の人びとの目にこの学校がどのように映っていたかをよく物語っていよう。七月王政の時代には、理工科学校生と偽る者が多く、そう名乗る者がいれば sin x と log y の微分を問い、それに答えられなければ即牢屋にぶち込むといわれたほどである。いうまでもなく理工科学校生が数学に秀でていたからである。

もちろん、小説『アルマンス』の時代背景は王政復古であるから、共和主義的傾向はそれ以前、あるいはその後の時代ほど際立ったものではなかった。一八一六年、オーギュスト・コントが加担したとされる一件によって一時閉鎖に追い込まれ[14]、その翌年一月には再開されるも、その後ろ盾の役割を負うことになったアングレーム公の言葉にもあるように、少なくとも表面的には帝政時代の理工科学校とはずいぶん内実を異にするようになっていた。

> その知識によってかくも秀でた学者の指導の下、またその方針によってかくも推奨すべきリーダーの権威の下で、理工科学校の生徒たちが神と国王と祖国に仕えることを立派に学ぶことを信じています。この方向に忠実に従っていれば、かれらはわたくしのうちに献身的な庇護者を見出すことでしょう〔以下略〕[15]。

「神と国王と祖国に仕える」――「祖国」は措くとしても、「神と国王」への奉仕はまさに旧体制の土台となっていたものである。事実上の放校になったオーギュスト・コントは、王政復古の時代に復活した理工科学校がいかに当初の教育方針から隔たっているかを舌鋒鋭く書き残している。たとえば知人で数学教師であったヴァラに宛てた手紙では、こんにち理工科学校という語が意味するのは修道院であり、そこに集められた生徒は木曜日と日曜日に退屈なミサに出席しなければならず、そのあとに訓示と晩課が待ってといるとし、「この施設は〔……〕高名なる聖ロウソク消し（saint Éteignoir）に献ぜられた」と書き送っている[16]。「ロウソク消し」とは、新聞『黄色い小人』（*Le Nain jaune*）が啓蒙主義的な思想的血脈を封じようとする王政復古の体制を痛烈に皮肉るためにでっちあげた架空の団体「ロウソク消し騎士団」を踏まえている。一八一五年一月五日の同紙記事には「ロウソク消し騎士団　組織規程」という見出しがあり、一三箇条の規約が載せられているが[17]、その第七条には、「騎士団の目的は光（lumières）を消す

ことであり、いかなる者も父方母方ともに四代にわたって無学であることを示さなければ入会を認められない」とある。また第一二条には、「かれらは哲学、自由主義思想、憲章（*charte constitutionnelle*）に対して嫌悪の宣誓」をすることが定められている[18]。これらは一風刺紙の戯言ではあるが、革命思想やボナパルティストの残党にとって王政復古がどのように見えていたかを如実に示すものだろう。啓蒙（Lumières）と革命の火を消してしまうのが「ロウソク消し騎士団」の役割である。帝政時代の理工科学校は、ナポレオンによって立て直され、数学を中心とする科学と進歩を信奉し、教員も生徒も祖国愛に燃える熱い集団であり、共和主義的な雰囲気の濃く滲む場であった。したがって、王政復古体制の思想的バックボーンと根本的に背反するのは当然で、閉鎖のあとに再開された理工科学校では、こうした気質はほとんど骨抜きになっていた。コントにすれば、まさに「ロウソク消し」に奉仕する学校に成りさがっていたのである。

ところで、この「ロウソク消し」というメタファーは当時かなり広まっていたようで、スタンダール自身、一八一五年七月二五日の日記に「今後フランスでなされることすべてにこのエピグラフが付されるにちがいない：ロウソク消しのために（*À l'éteignoir*）」と記し、そこにはロウソク消しの絵まで描かれている（図参照[19]）。ナポレオンの没落とともに失職し、王政復古期の前半をイタリアで過ごすことになるスタンダールにとっても、「ロウソク消し」は復活した王政の紋章であり象徴ともいうべきもので、現行体制に対する反感は、思想的基盤に大きな違いがあるとしても、コントをはじめとする元理工科学校生が抱いた感情と相通じるものがあった

であろう。最晩年の小説『ラミエル』において、ミオサンス公爵夫人の城館の外見が「ロウソク消し」を思わせることからしても、[20] このイメージへのこだわりは生涯もち続けていたものと思われる。

では、貴族マリヴェール家の息子オクターヴの場合はどうであろうか。かれが入学したのは以上に述べたような王政復古期の理工科学校である。やはり第一章には、卒業したあとの主人公が理工科学校の生活を懐かしむ場面があるのだが、そこで青年に回想されている理工科学校は祖国愛に燃える血気盛んな帝政時代の雰囲気をほとんど感じさせない。むしろそこから遠く隔たった印象さえ受ける。

> かれは理工科学校の自分の小部屋がとても懐かしかった。この学校での滞在はかれにとってきわめて大切なものであったのは、僧院（monastère）の隠遁生活と静寂のイメージを与えてくれるものだったからだ。長いあいだ、オクターヴは世の中から身を引いて、人生を神に捧げようと考えていたのだ。[21]

オクターヴのこのような世捨て人的な思いや行動は、両親をはじめ周囲に「奇妙」で不可解に映るものであり、性的不能の主題を匂わせるところでもあり、スタンダールの主人公たちに特有の閉所へのノスタルジーの滲む部分だが、こうした読みをひとまず捨象するならば、理工科学校そのものがそのような青年の郷愁を誘う場所でありうるほどに変質していたともいえるのではないだろうか。少なくともコントが「修道院」に等しいと断じたように、オクターヴがこの場所に僧院の雰囲気を感じたとしても歴史的事実と矛盾しないのである。実際、「神」に奉仕することも、さきに触れたとおり、当時の理工科学校の表向きの教育方針に背馳するものではなかった。もちろんスタンダールはこのような叙述をとおして理工科学校の変質した体制を批判しようとしているのではない。理工科学校生のなかには、

「ロウソク消し」の時代にあってもナポレオン時代の共和主義的伝統を熱き思いとして内に秘めているものも多く、学校の指導方針に抵抗を見せる事件も絶えなかった。一方で、バルザックがさきの文章で書いていたように、この学校は「金持ちの青年、あるいは良家の青年」が入るのにふさわしいものとして、むしろ王政を支持する上流社会から認知されるようになっていた。したがって、理工科学校という存在自体が変動するイデオロギーのなかで矛盾に満ちた両義的な性格をもつ施設になっていたのであり、小説家はそのような両義性のなかに主人公を置いたとも想像されるのである。

ところで、自分が進学を放棄した理工科学校をその後どのように思っていたかについては、さきに引用した『ブリュラール』の記述のほかにもいくつか辿ることができる。一八〇三年の日記には、「人間」という見出しをつけ、職業項目にわけて個人の氏名を列挙している部分があるのだが、その項目のひとつに「理工科学校生」というのがあり、クロゼ、ロブスタン、Fr・フォール[22]、P＝エミール・テセールの名があがっている[23]。たとえば最後のポール＝エミール・テセールという人物については『ブリュラール』にも登場しており、以下のようにかなり否定的な口調で語られている。「この時期の教育が生んだ傑作は、青い服を着て、おとなしくて偽善者、優しい小さなろくでなしで、三フィートもなく、証明される命題を暗記するのだったが、それらを理解できているか否かについては少しも頓着していなかった[24]。」また、この人物が中央学校のデュピュイ先生や個人授業のシャベール氏のお気に入りであることを述べたあと、次のように記される。「理工科学校入学のための試験官で、偉大な幾何学者の弟であったあの愚か者のルイ・モンジュは、〔中略〕ポール＝エミール〔・テセール〕の才能のすべては驚くべき記憶力だということに気づかなかった[25]。」さらに、この同郷人が理工科学校を出てしばらくのちに聖職者になったことを報告したあと、「かわいそうにかれは胸を患って死んだが、そうでなかったらわたしはかれの運勢を喜んで見届けてやっただろう。いつの日にか、

かれに思う存分何発ものビンタをくらわしてやろうという度の過ぎた欲望とともに、わたしはグルノーブルを去ったのだ」と結んでいる。[26]

さて、先にみた一八〇三年の日記においては、「理工科学校生」という項目を設けたこと自体、自ら入学しなかった学校への思いが消えないままに存在していたことを窺わせる。また、三十数年後のテセールを回想する文章のなかにも、スタンダールとの個人的人間関係の実際がどうであったにせよ、やはり理工科学校が影のようにつきまとっているようにみえる。入学を放棄した者が入学を果たした同郷者に対して抱きうる屈折した感情をここに読み取るのは困難ではない。スタンダールにとって理工科学校とは、自分が籍を置くべくして置かなかった場であり、放棄したあとにナポレオンによってあらたなステイタスを獲得し、時代とともに評価が上昇していくにつれて、学校への思いは両義的なものになっていったように思われる。もし理工科学校に入学してポリテクニシヤンになっていたら、その後の生活は変わっていたのではないか――そのように想像することもあったのではないだろうか。

こう考えてみると、最初の長編小説の主人公が理工科学校出身者であるのは、いくつかの点で象徴的である。まず、かれには「欲する」対象が不在である。「欲する」こと、すなわち「欲望」の欠如は、「不能」を言外に暗示するための伏線であるともいえるが、「ロウソク消し」の手先と揶揄されつつも、当時の理工科学校に集まるブルジョワ階層の生徒の多くは祖国を守るという情熱の血を滾らせる若者たちであり、そのなかにあってオクターヴは内向する変人であって、青春の只中にありながら外に開かれた社会的な目標や志とは無縁にみえる存在である。理工科学校への進学を郷里からの脱出の手段としてしか考えていなかった青年もまた、社会おける将来的な欲望の対象をもっていなかった。かりに劇作家になりたいという漠たる思いがすでに芽生えていたとしても、それを社会化された欲望とよぶにはあまりにも漠然としすぎている。スタンダール自身、入学を放棄したあと精神不安定に陥り、一種の心の病にかか

っているから、この点でもオクターヴに近いといえる。

ピエール・バルベリスは主人公の「不能」を「社会的不能の形象としての性的不能」[27]としているが、この小説執筆時期のスタンダールの精神的状況もあわせて考えるなら、「欲望の欠如」に象徴される消極性は、およそつぎのように理解しうるだろう。つまり、新しい勢力のまえに没落していくことを運命づけられた貴族階級の社会的無力を生理的な「不能」によって表象しているのだが、さらにその深層にはスタンダール自身が置かれていた政治的イデオロギーのジレンマが透けて見えるのである。すなわち、みずから貴族階級を批判しながらも、その一方で、『産業者に対する新たな陰謀について』にあきらかなように、貴族階級と対立する自由主義陣営にも居場所を見出すことができずにいるという、じつに不安定な政治的立場にいたということである。ナポレオンによって政治化された理工科学校、したがってボナパルティズムの刻印の濃い理工科学校が復古王朝において再組織化されることによって思想的に折衷化され中和化されるのと同じように、貴族であるオクターヴが理工科学校生であるという設定もまた、同じような両義性のうえに成り立っている。この両義性は、小説の最期で語られるオクターヴの死が、バイロンをはじめとするギリシャ独立戦争に志願した英雄たちの土地ギリシャを背景にしているという事実にもあらわれている。いずれにしても、『アルマンス』の理工科学校は、オクターヴの両義的性格を照らし出すうえで重要であったというべきだろう。

b. リュシアン・ルーヴェン

スタンダールの小説作品には、世界の古典に数えられるものとそうでないものとがある。『赤と黒』と『パルムの僧院』は世界文学全集という叢書があれば必ず収録される、いまや押しも押されもせぬ名作である。一方、『リュシアン・ルーヴェン』や『ラミエル』は未完に終わり、『アルマンス』もこの作家の代表作とまではみなされていない。

じつは、この二つの系列のなかで、理工科学校のような学校が登場するのは、後者の系列ばかりなのである。

平民ジュリアン・ソレルに学歴がないのと同様（のちの神学校という特殊な教育機関は別にして）、イタリアの大貴族ファブリス・デル・ドンゴにも学歴がない。スタンダールの小説で傑作とよばれ後世に読み継がれているものは、階級に属しながらもそれを逸脱するような潜在性と柔軟性をもった主人公を造形している。材木商の小倅から一時的にせよ貴族の称号を獲得するまでに昇つめるジュリアンは、階級の壁を易々と飛び越える存在であるし、ファブリスはといえば、さまざまな人間たちのあいだ、いわば異種環境のあいだを自在に飛び回るような印象を与える。ミシェル・ゲランは『赤と黒』の主人公の父ソレルに土着民的本質（autochtonie）を見、これに対して息子ジュリアン・ソレルには社会文化的移動性（migrations socioculeturelles）の匂いを嗅ぎとっている[28]。このゲランの見方を借りるならば、ジュリアンやファブリスはスタンダールの登場人物たちのなかでもすぐれてウラノス的であり、この天空神が宇宙全体を纏うがごとく存在するように、複数の社会文化的磁力に縛られることなく、自由闊達に越境していく。個々の局面では特定の場の社会的刻印を受けながらも、そうした土着性をいとも簡単に脱ぎ捨ててつぎの局面へと飛翔するのである。『赤と黒』や『パルムの僧院』に感じられるダイナミズムは、おそらくこのような主人公の据えかたに多くを負っているように思われる。

これに対して、オクターヴもリュシアンもむしろ自らの階級への「土着性」に捕らわれているような印象を受ける。そしてこの両者には、そうした土着性の刻印のひとつとして理工科学校という学歴が付与されているのである。『リュシアン・ルーヴェン』もまた、『アルマンス』と同様、理工科学校に言及する一行から開始される。

リュシアン・ルーヴェンは、かれのすべての仲間と同様、禁足になっていた日に折悪しく散歩に出かけたこと

で理工科学校を放校にされていた。それは、一八三二年、あるいは三四年の六月、あるいは四月か二月にあった有名な日の一日があったころである。[29]

ここに記されている日付は、一見不正確かつ曖昧に書かれているが、いずれも七月王政初期の政治的な事件に関わるものである。ミシェル・クルーゼが適切に指摘しているように、[30]小説があまりに現実に近すぎること、要するに物語が正確な歴史的事実に結びつけられることによって、いわゆる小説的効果が低減するのをスタンダールが嫌がった結果、このようなぼかし表現になったかのように見えて、じつはそうではない。むしろ、主人公の放校という一事によって、この時代に具体化した政治的動乱のいくつかを同時に想起させようという作者の意図がそこに込められていると考えるべきなのである。

まず、一八三二年という年号については、その年の六月五日から六日にかけてパリで大規模な蜂起が勃発した。これはラマルク将軍の葬儀をきっかけに起きたものであり、実際、理工科学校生はそこに深く加担していたことはよく知られている。外出禁止となっていた理工科学校生たちは葬儀に加わることも、そこに代表者を出すことも許されていなかったのだが、葬送の最中、六〇名ほどの理工科学校生が禁足を破って葬列にあらわれたのであった。これがもととなって騒ぎは拡大し、「学校万歳」という叫びや「共和国万歳、フィリップを倒せ」という声があちこちから上がり、結局、蜂起へと発展した。[31]のちにヴィクトル・ユゴーが『レ・ミゼラブル』において活写するサン・メリ界隈の事件である。これがもとで何人かの生徒は学校を追われることになったが、リュシアンの場合も直接的にはこの事件と関係しているのであろう。

また「二月」に関しては、一八三一年二月のこと、一八二〇年のベリー公暗殺事件を偲んで正朝王党派の執り行う

ミサに民衆が抗議、その場所であったサン＝ジェルマン＝オセロワ教会を襲撃、略奪した。さらに一八三四年四月についていえば、フランス各地の都市で共和派の労働者による暴動が起きていた時期である。とくにリヨンでは四月九日の蜂起で多くの労働者が虐殺され、一三日にはパリのトランスノナン街で大虐殺が起きたことも有名であろう。A-M・メナンジェールは、この時リヨンで起きた暴動の場所がヴェーズ（Vaise）地区であり、その名称がそのまま小説の内務大臣の名ヴェーズに移行していると解釈している。[32]

このように、スタンダールは冒頭から作為的に小説のなかに政治をもちこもうとしているのだが、本稿の論旨からして重要なのは、そこに理工科学校の存在と共和主義思想の結びつきが明確に打ち出されていることである。『アルマンス』の歴史的背景であった王政復古時代の状況とは異なり、七月革命を経た直後の理工科学校のイメージはかなり様変わりしていて、ポリテクニシアンたちはあきらかに共和主義の側にたち、紛争においては民衆の側にあった。七月革命のあと、早くも八月にギゾーは「栄光の三日間」における理工科学校生の活動に敬意を表して章を授けようとしたのだが、生徒たちは反発し、新しく成立したオルレアン家の王政を「だまし討ちによって据えられた」体制として、これを拒否した。そして率先して反体制側についたのである。かくしてさきに触れた「禁足」が課せられることになったわけだが、三二年の暴動のあと、リュシアンと同じように七名の生徒の放校が最終的に決定したのは、さらにこのあと、三三年七月二七日に「栄光の三日間」を記念して何人かの生徒が「火薬の陰謀」（Conspiration des Poudres）とよばれる儀式を行ってのちであった。[33]この一件のあと、理工科学校は政治から遠ざけられることになったのである。

したがって、理工科学校の共和思想がもっとも現実味を帯び、生徒たちの具体的行動と結びついていたのは、七月革命から一八三三年八月までの三年間であった。それゆえ、冒頭の記述にある放校時点とこの小説が実際に展開して

いる時期とでは、理工科学校の位置づけが微妙に異なっていることを念頭に置いておく必要がある。

当時、かなり常軌を逸した（assez fou）、とはいえとても勇気のある若干の青年が、国王（king）の廃位を要求しており、チュイルリー宮の主から快からず思われている理工科学校は、構内に厳重な禁足をくらっていた。散歩に出たあくる日、リュシアンは共和主義という理由で放校された。はじめはひどくがっかりしもしたが、二年まえから、もう日に十二時間も勉強しなくてよいといって、この不幸に諦めをつけている。[34]

前述のとおり、実際には「散歩」のあくる日に放校になった人間はいないので、この設定は史実的にみて正確とはいえない。かれらが放校の憂き目にあったのは、一年後の三三年八月であったことは述べたとおりである。しかしここで興味深いのは、この草稿のこの部分を執筆しているのが一八三五年の七月二八日だという事実である。[35]まさに「栄光の三日間」のちょうど五年後ということだ。そしてこの日付は、「二年まえから」諦めをつけているという文章とも符合する。七月革命で異彩を放った理工科学校生は、ラマルク将軍の葬儀の一件をはさんで、「栄光の三日間」を記念するとした「火薬の陰謀」事件によって放校処分となったわけだが、この事件からちょうど二年後のゆかりある日にスタンダールはこの部分を書いているのである。小説のなかに政治を引き入れるのに理工科学校がいかに重要な役割をはたしているかが見てとれよう。

ここに使われている「常軌を逸した者」（fou）とは、スタンダールの読者ならよく知っているように、尋常とはいえないエネルギーに突き動かされる人間を指すときにむしろ肯定的に用いられる言葉である。この小説家はみずからの主義をはっきりとはみせず、始終韜晦に韜晦をかさねるのが常であるが、リュシアンが放校されるまでの理工科学

校は共和主義的であり、その思想を信奉していた生徒たちをあたたかく見ようとしていることは伝わってくる。リュシアンが早々に諦めをつけることができたのは、「十二時間の勉強」から解放されたのをよしとしたからだけではなく、じつはこれを境に理工科学校が政治から遠のき、次第に変質したというスタンダール自身の認識の反映からでもあるのだ。そして、その「変質」を決定的にしたと思われるのが、サン＝シモン主義との関係である。

（三）理工科学校とサン＝シモン主義

他の小説にはほとんどあらわれることのない「サン＝シモン主義者」（saint-simonien）という語は、その女性形も含めれば『リュシアン・ルーヴェン』には一四回も出てくる。サン＝シモン主義を攻撃した『産業者に対する新たな陰謀について』の直後に書かれた『アルマンス』にさえ見出すことのできないこの語が、なぜ『リュシアン・ルーヴェン』にこれほど登場するのだろうか。七月王政のこの時期、この主張が実業界に相当の影響力をもっていたからではあるが、理工科学校との関係も見逃せない。まずはもと理工科学校生のリュシアンの周辺から見ていこう。

リュシアンは従兄のデヴェルロワから、煙草代ひとつ稼げない、なんの取り柄もない子どものような扱いをされ[36]、それを報告した父に今度は、「ひょっとしてサン＝シモン主義者にでもなろうとしているのか」と冷やかされる[37]。イヴ・アンセルが述べているように、共和主義者とサン＝シモン主義者はこの時代、一般市民にはオーバーラップして見られるところが少なくなかった[38]。もちろんスタンダールの立場からすれば、これらはまったくの別物であり、父ルーヴェンの口から繰り出されるに「サン＝シモン主義者」という言葉は、皮肉たっぷりの嘲笑的名辞であって、ここにはスタンダール自身の主張も濃く反映されていると考えるべきだろう。フェルナン・リュードのように、この小説におけるサン＝シモン主義への言及をこの思想にスタンダール自身が共鳴していたことの証であるかのごとくみな

すのは、あきらかに偏向した読解というべきである。[39] そうではなくて、スタンダールがこの思想集団にみたのは、七月王政下にますます閉鎖的かつ宗教化していくその姿であったにちがいない。

弟子たちが集まり、一八三〇年にバザールとアンファンタンが中心となってサン＝シモン主義の理念を集約した書物『サン＝シモンの学説解議』が出されるが、そこで示されている歴史認識は、サン＝シモンの総合的時代と分析的時代という概念をかれらなりに発展させたものである。もともとサン＝シモンは、おそらくバランシュらの循環史観の影響もあり、対照的な二つの時代、すなわち分析的精神が支配的な時期と総合的精神が支配的である時期とが交代するものとして歴史を捉え、分析的な時代は批判的かつ破壊的であるのに対し、総合的な時代は構築的であり建設的であるとした。より具体的には、中世を総合の時代とし、宗教改革とともに分析的精神の支配する時代への道筋が拓かれ、啓蒙時代と大革命がその頂点とみなされる。[40] 一方、弟子たちは、師の考えの基本的枠組みを踏襲しつつも、この対立概念を「批判的」精神と「有機的」精神に読み替え、哲学者が登場する以前の古代には有機的な精神が支配的だったとし、その時代から中世キリスト教社会に入るまでを過渡的な批判的世界とみなした。また、キリスト教が核となって全体に浸透し、統一的なまとまりを形づくった中世は、有機的な時代であるとされる。師と同様、一六世紀の宗教改革が大きなターニングポイントとなり、啓蒙の哲学や大革命の混乱、さらには一九世紀初頭の緊張はあらたな批判的時代を示すものであり、個人主義的で利己的なのも批判的時代の特徴である。[41] そのうえでサン＝シモン主義者たちは、この批判的な時代に幕を下ろし、来たるべき有機的時代への使者になろうとしたのである。有機的時期は、すべての個別的性格を支配する一般的に性格を示すものであり、したがって宗教的であるとする。「そうして宗教は人間の活動のすべての行為を包摂する。一言でいえば、宗教は社会的総合（synthèse sociale）なのである。[42]」

このように、サン＝シモン主義者たちはその出発点からあらたな宗教による凝集力に依拠しつつ、その社会理論

と歴史の進展を論理づけていたことがわかる。とはいえ、師の死後に刊行されはじめた『生産者』は銀行家ラフィットなどからの有力な財政支援を取り付けていたし、自由主義的経済を拠り所としていた産業家をはじめ、反復古王政の思想に集うものたちは、かれらの主張のすべてではないにしても少なからず評価していた。『生産者』の刊行は一年後には行き詰まり、一八二八年に復活を試みるもすぐに失敗するのだが、それにもかかわらずこの時期から一八三〇年にかけてサン＝シモン主義は賛同者を増やしている。とくに多かったのは理工科学校出身の技師で、それ以外にも法曹関係者や医師が加わった。サン＝シモン主義者の集団は、七月革命前夜、無視できない政治的運動団体とみなされるにいたっていたのである。

ところで、かれらが主張したのは、社会に厳然と存在する階級を打破しようとしたルソーの信奉者たちとは逆に、能力によるヒエラルキーの容認であった。このような階層的枠組みは師サン＝シモン自身の思想のなかにすでにあり、それを踏襲したものである。サン＝シモンにとって来たるべき社会とは、「人間の本来的な資質・才能の不平等を直視し、この自然的不平等を梃子にして、すべての人が各々の仕方で生産に全エネルギーを投入し、各々の能力と労働に応じて生産物を受け取ることができる社会」[43]であり、その社会構造は、生産を頂点として、それを支えるための諸制度がその下に従属しているものでなければならなかった。そして、そうした個々の能力をよく最も良く備えた人間は、企業家、科学者、芸術家、肉体労働者であり、「その中でも最も多く能力を備えた少数のエリートが指導層を形作り、その指導の下で全産業者が一丸となって生産に邁進する姿こそ、理想社会のあるべき姿」とされた[44]。旧体制下の身分構造とは異なる新たな階級を基盤にした社会ヴィジョンは、ほとんどそのまま弟子たちにも受け継がれたが、このような固定的な階層秩序は七月王政下の自由主義者たちにはまちがいなく反動的に見えたであろう。とくにこの時代の自由主義思想家たちにとって受け入れがたく思われたのは、階級の最上位に位置するとされる「司祭」(prêtre)

の存在であった。実際、すでに『生産者』においても見てとれたこのような教権政治的な色合いは、汎神論的な新たな宗教を唱導しようとするわけであるから、旧来のカトリック勢力からはもちろん、ラムネーのようなカトリック改革派からも敵視された。

おそらくスタンダールがサン＝シモン主義者たちを敬遠した大きな理由のひとつにこの点があげられるように思う。『リュシアン・ルーヴェン』執筆時期には、サン＝シモン主義者たちのこうした傾向は一層はっきりしていたはずである。スタンダールはこの未完小説の草稿最終部分で「サン＝シモン主義者」という言葉をもう一度使用している。すなわち、父ルーヴェンの死去と銀行の破産によって零落の身となったリュシアンについての世評である。

> 世間は、この大きな変化にもリュシアンがまったく平静を失わなかったのは、かれがじつはサン＝シモン主義者だからで、この宗教（religion）がなくなったとしても、必要ならまた別の宗教をつくりだすに違いない、と信じ込んだ。[45]

ここでサン＝シモン主義が「宗教」という言葉でよばれていることは重要である。このような世評が非現実的ではないほどに当時のブルジョワジーのあいだにサン＝シモン主義が冷ややかにではあれ、一種の「宗教」として広く認知されていて（これはサン＝シモン主義者たちの意図でもあった）、この教義を精神的支えにして理想主義的な社会変革を夢見るものが多かったということである。もちろん、実際のリュシアンはサン＝シモン主義者ではない。小説の冒頭でこそ浮世離れした世間知らずではあったが、軍人としてのナンシー〔モンヴァリエ〕滞在[46]、パリに戻ってからの政治家秘書としての活躍を通して成長し――もちろんそれらは父親の絶大な影響力のもとで得た機会であり

地位ではあったが――、もはやサン＝シモン主義者と揶揄されるような存在ではなくなっていた。とくに、スタンダールの筆が途絶えることになる最後の部分において注意を引くのは、リュシアンの変貌ぶりである。

かれは無上の喜びをもってジュネーヴ湖畔に二日滞在し、『新エロイーズ』で有名になった場所を訪れた。クラランのある農家で、ヴァランス夫人のものだったという刺繍のあるベッドをみつけた。

悔みの言葉を受けるにはまことにふさわしくないパリでは、精神的に潤いのない状態に苦しんでいたのに、それにかわって優しい憂愁が訪れていた。おそらくかれは永久にモンヴァリエ〔ナンシー〕から離れていこうとしていたのだ。

この悲しみがかれの心を芸術的な感情へとひらいた。知識のない人間にはありえないような喜びをもって、かれはミラノ、サロンノ、パヴィアの僧院などを見てまわった。ボローニャやフィレンツェでは、ほんのちょっとしたものにも心を動かされ、ほろりとした。三年前だったら、そんな感情は後悔の種になったに違いない。[47]

ここでリュシアンは「芸術的な感情」(sentiments des arts) に覚醒している。そして溢れんばかりの「喜びをもって」イタリアの土地を巡っている。父の死と銀行の倒産によって、芸術的感傷に浸ることがほとんど許されないパリでの生活からようやく解放されたといわんばかりである。破産の憂き目にあってなお、冷たい表情を崩さず、世間からサン＝シモン主義者とみられるような振る舞いをせざるを得ないパリ（したがって心は乾ききっている〔secheresse d'âme〕）を離れて、一時的にせよ、[48]自身のありのままの心の動きに身を任せる心地よさが芸術的感情と結びついている。元理工科学校生のサン＝シモン主義者的ともみえる表面的振舞いと芸術的感情に覚醒するリュシア

ン――両者の距離はスタンダールのサン＝シモン主義への遠さを示している。

（四）スタンダールの芸術とサン＝シモン主義

ところで、サン＝シモン主義者と芸術はむしろ不幸な関係にあった。原理的にいえば、人間生活の物質的次元と精神的次元の統一をはかることがこの思想の根幹にあるわけであるから、文学や芸術が寄与するところは大きいはずである。実際、『サン＝シモンの学説解議』では、芸術の創造活動が、未来の宗教におけるもっとも抽象度の高い真理と最大多数の人びとの感性とを結びつける役割を負うものとして捉えられている。芸術家は司祭を手助けするものであって、少々言い方を変えれば、芸術は宗教のためにあり、芸術家は司祭の僕（しもべ）であり道具である、ということだ。

〔芸術家は〕司祭の思想をみずからの言語に翻訳し、その思想が纏いうるあらゆる形式のもとにそれを具現化して万人に感知しうるようにする。芸術家は司祭が創造あるいは発見した世界をみずからの内に反映させ、それを象徴（symbole）に還元して万人の目にあきらかにする。司祭がみずからをあらわすのは芸術家を介してなのである。一言でいえば、芸術家は司祭の言葉（verbe）なのだ。[49]

ここにあきらかなように、サン＝シモン主義者が芸術に求めていたものは、目的化された芸術、いわば御用芸術である。この時代にはまだ「芸術のための芸術」という運動は生まれていないにしても、自由主義者たちが思い描いた芸術はそのような拘束のない自立したものであった。このことは、この時代がまさに「芸術家」（artiste）という言葉が大きく昇格する時期にあたっているということからもわかるであろう。自由主義的でロマン主義的な傾向をも

った作家たちであれば、サン＝シモン派が唱えたような従属的な芸術家は時代に逆行するものと感じたはずである。たとえばジョゼ＝リュイス・ディアズ（José-Luis Diaz）が詳細に分析してみせたように[50]、ロマン主義の時代が到来するのと並行して、「文人」（homme de lettre）、「著述家」（écrivain）、「詩人」（poète）、「芸術家」（artiste）という用語の認識上の配置が微妙に変化し、一八三〇年前後、« homme de lettres »という語はすでに軽蔑的な響きをもっていた。これに対し« écrivain »は中立的で、特別な価値判断に導くような社会的有意性をもつ言葉ではなかった。一方、書くことを目指す人間の誰しもが憧れたのは« poète »という称号であって、これはジャンルを超えて文学的職業を示すものであり、ひとつの理想になっていた。そして、これと並ぶもう一つの称号が« artiste »である。これはまさに一八三〇年頃から際立ってきた現象で、*L'Artiste*誌が発刊されたのも一八三一年二月であり、発刊の内容見本を書いたジュール・ジャナンが「アルティスト」を「美しい語」として賞揚したのは有名であろう[51]。文学活動においてあらゆるものから自由であることを第一とし、ユゴーの『クロムウェル』序文に先立って独自のロマン主義文学論『ラシーヌとシェイクスピア』を発表したスタンダールにとっても、文学や美術や音楽がある特定の思想や宗教の道具になるという考えは首肯しがたいものであった。スタンダールは、自由主義的ブルジョワジーの一部に食い込みつつも、真の自由主義――言い換えれば個人主義的自由主義――からは遠いサン＝シモン主義にリュシアンを微妙に関係づけることによって、みずからの立場をあきらかにしているのであろう。

以上のように、サン＝シモン主義者たちの「芸術家」は、個人主義的自由主義者たちが呼吸していた時代の空気とは相容れないものであり、今日的感覚からすれば、そこに多分に社会主義的で国家主義的な匂いを嗅ぎ取るひとも多いのではないだろうか。

一方で、こうした宗教的色彩にもかかわらず、アンファンタンやバザールのもとには多くの若者が集まっていた。

そのなかでも際立っていたのは理工科学校の学生であったことはすでに述べたが、これは、国家の技官、砲兵・工兵技術における専門職を理工科学校出身者が供給していたことと深く関係している。もともと国家防衛という愛国主義的な雰囲気のなかで祖国愛と共和主義を育んできた理工科学校生は、サン＝シモン主義がますますその色彩をつよめていく国家主義的な要素にも感化されやすかったのであろう。この思想の唱道者たちもまた、こうした専門的知識を有した若者への働きかけを重点的に行い、ミシェル・シュヴァリエの書簡にもあるとおり、理工科学校出身者や土木学校卒業生を大いに惹きつけていたのである。[52] このような理工科学校の性格は、個人の自由の発露を徹底的に重要視したスタンダールの政治思想や美学とは相容れない。おそらく理工科学校の共和主義的な情熱を懐古的に評価しながらも、サン＝シモン主義と結びつきやすいその体質を的確に理解していたのではないだろうか。

二〇世紀の著名な経済学者のハイエクは、理工科学校のこうした知的風土が、こののちの全体主義や社会主義の無視できない水脈のひとつになったと述べている。

> 計画的に構成されていないどんなものにも意義を認めようとしないあの統括的精神、軍事的訓練と工学的訓練の二つの源泉から生み出されるあの組織愛、「成長しただけ」のどんなものより、意識的に構成されたものすべてに対する審美的な好み、これらこそ若い理工科学校生の革命的情熱に加わった――そして時の経過とともにそれにとってかわった――ひとつの強力な新しい要素なのであった。この新しいタイプの人間は、「すべての政治的、宗教的、社会的問題に対して、他の誰よりも、正確で満足のいく解答をもっていることを誇りに思っており」、「学校で橋や道路を作るのを習ったように、宗教を作りだそうとした」といわれており、その特異な性格は早くから注目され、彼らが社会主義者になる傾向があることも、しばしば指摘されていた。ここでは、以下のことを指摘

するにとどめたい。すなわち、サン＝シモンが、社会再組織に関する最初期の、そしてもっとも空想的な計画のいくつかを抱いたのは、まさにこうした雰囲気の中であったということ、またこの理工科学校が設立されて以来最初の二〇年の間に、オーギュスト・コント、アンファンタン、ヴィクトル・コンシデラン、後の何百人ものサン＝シモン主義者たちとフーリエ主義者たちがここで訓練をうけたということ、そして一九世紀を通じて、ジョルジュ・ソレルにいたるまで、一連の社会改革者がそれにつづいたということである。[53]

誤解を恐れずにいえば、スタンダールはこうした社会主義的精神を育む理工科学校の知的風土を鋭敏に感知していたのかもしれない。さきに「真の個人主義」という言葉をいささか無造作に使用したが、これはハイエク自身がロック、マンデヴィル、ヒューム、アダム・スミスら、のちの自由主義経済の根幹をつくる思想家たちに「真の個人主義」を見、百科全書派、ルソー、重農主義者たちなど、多かれ少なかれデカルト的合理主義に影響された思想家に「偽の個人主義」を見たことに依拠している。[54] いうまでもなく、自由放任の社会状態に対して、公共の福祉のために中央集権的な統制の必要を強調する社会主義や集産主義へと傾斜していくのは後者であって、スタンダールの経済思想や芸術思想が依って立つ透徹した個人主義とは根本的に方向性を異にしていたのである。

期待していたように父が遺産を残さなかったことに生涯不満の声をあげ続けたスタンダールにあって、サン＝シモン主義が実践しようとした相続の見直し[55]など、到底許容できるはずもない。経済的にも芸術的にもかれの個人主義は徹底していたというべきなのである。理工科学校出身（中退）の主人公たちにとって、芸術が経済原理のなかに埋没してしまいそうな状況にあり、他方であたらしい政治的価値（共和政や民主主義）が公共性のなかに引き込まれつ

つある時代に、両者から自由であろうとする個人主義をどのように保つかがもっとも重要な問題であった。その個人主義の十字架を背負いつつ社会に対峙する若者たちのありようは、一八二〇年代から三〇年代にかけてスタンダールがおかれていた精神的状況の反映そのものなのである。

註

（1）*Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes II*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1982, p. 859. 傍点部は、原文イタリック。以下、同様。

（2）François Michel, « Stendhal mathématicien », in *Stendhal Club*, no 20, 1963, pp.277-295. ヴィクトール・デル・リット『スタンダールの生涯』鎌田博夫・岩本和子訳、法政大学出版局、二〇〇七年、四八頁参照。

（3）*Vie de Henry Brulard*, *op. cit.*, p. 873.

（4）*Ibid.*, p. 874.

（5）*Loc. cit.* なお、ボナパルトによる「ブリュメール一八日」のクーデタは、スタンダールが理工科学校受験のためにグルノーブルからパリに向かう旅程のあいだに起きている。「[……] パリから二〇か二五里のところにあるヌムールでわれわれは前日に起きたブリュメール一八日（すなわち一七九九年一一月九日）の事件を知った」（*ibid.*, 869）。かれは一〇月三〇日にグルノーブルを出発、ヌムールに一一月九日、パリにはその翌日に着いている。ここで「前日」とあるのはあきらかに奇妙で、デル・リットも注記しているとおり、「その当日」と書くべきところを勘違いしたのであろう（*ibid.*, p. 1501, note 3）。

（6）Balzac, *Wann-Chlore*, in *Premiers Romans de Balzac II*, Robert Laffont, «Bouquins», 1999, p. 808.

（7）Balzac, *Les Chouans*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1978, t. VIII, p. 975.

（8）Balzac, *La Recherche de l'Absolu*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1979, t. X, pp. 766-767.

（9）Balzac, *Le Curé de village*, in *La Comédie humaine*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1978, t. IX, pp. 798-799.

（10）*Armance*, in *Œuvres romanesques complètes I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, p. 89.

(11)「ポリテクニーク」という名前は、いうまでもなくそこで教えられるべき技術の多様性を象徴するものであるが、この名称を最初に提案したのは、創設に関わった一人、クロード・ブリウール（Claude Prieur）である。

(12) こうしたイメージはいまだに続いており、フランス社会においてこの学校がもちつづけているステイタスと重要性については、ピエール・ブルデューが『国家貴族』のなかで詳細に分析したとおりである。Pierre Bourdieu, *La noblesse d'État. Grandes écoles et esprit de corps*, Les Éditions de Minuit, 1989.（『国家貴族　エリート貴族と支配階級の再生産Ⅰ・Ⅱ』立花英裕訳、藤原書店、二〇一二、二〇一三年）

(13) Gustave Flaubert, *Le Dictionnaire des idées reçues*, Livres de Poches, 1997, p. 153.

(14) Jean-Pierre Callot, *Histoire de l'École polytechnique*, Stock, 1975, pp. 84-86.

(15) *Ibid.*, p. 91. Ambroise Fourcy, *Histoire de l'École polytechnique*, Paris, chez l'auteur à l'École polytechnique, 1828, p. 346.

(16) *Lettres d'Auguste Comte à M. Valat*, Paris, Dunod Éditeur, 1870, p. 24.

(17) *Le Nain jaune ou Journal des arts, des sciences et de la littérature*, Paris, Imprimerie de Fain, no 341, 5 janvier 1815, p. 7.

(18) *Ibid.*, p. 8. 騎士団の基本原則は、「統治するために頭を麻痺させ、説得するために執拗に責め立て、成り上がるために這いつくばる」ことであった。「闇の守護神」というリストには、タレーラン、フォンターヌ、シャトーブリアン、ド・ボナルド、ミショー、ベルタン、セギエらの名前があがっている（たとえば Chateaubriand は le Révérend Père Aubry de Castelfugens、Cuvier は Naturalis Viécur といった具合である）。

(19) *Journal*, in *Œuvres intimes I*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1981, p. 941.

(20) A－M・メナンジェールもそこにこの象徴性を読み取っているし、プレイヤッド版の注釈者も同様である。Cf. *Lamiel*, éd. d'Anne-Marie Meininger, Gallmard, coll. « folio », p. 331; *Lamiel*, Pléiade, pp. 1471-72.

(21) *Armance*, p. 92.

(22) 邦訳（『全集』第一二巻）では「フェリックス・フォール」としているが、フレデリック・フォールが正しく、フェリックスの弟にあたる人物である。両者ともにスタンダールと同郷で、少年期の仲間であった。

(23) *Journal, op. cit.*, p. 49.

(24) *Vie de Henry Brulard, op. cit.*, p. 774.

(25) *Ibid.*, p. 775.

(26) *Loc. cit.* ちなみに、日記におけるこの人物姓の綴り字は Teisseire であるのに対し、『ブリュラール』の草稿では Teyssère となっているが（*Œuvres intimes II*, p. 1457）、デル・リットの注でテセールは一八〇一年に理工科学校に入学しているとされているし（*ibid.*, p.1458）、アンブロワーズ・フルシの『理工科学校史』の巻末に付された名簿（Liste générale, par promotiond、entrée, des élèves de l'École polytechnique）にも Teyssayrre という名があり、一八〇一年入学となっているから（Ambroise Fourcy, *op. cit.*, p. 507）、同一人物に間違いはないだろう。

(27) Pierre Barberis, *Sur Stendhal*, Éditions sociales, 1982, p. 90.

(28) Michel Guérin, *La Politique de Stendhal*, PUF, 1982, p. 42.

(29) *Lucien Leuwen*, in *Œuvres romanesque complètes*, t. II, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, p. 89. 以下、たんに *Lucien Leuwen* とのみ記されている出典は、この版によるものとする。

(30) *Lucien Leuwen*, éd. de Michel Crouzet, Flammarion, 1982, t. I, p. 342, note 7. プレイヤッド版の注釈者もこの点には同様に触れている。*Lucien Leuwen*, p. 1269, note 4.

(31) Louis Blanc, *Histoire de Dix ans. 1830-1840*, Paris, Pagnerre, 1843, t. III, p. 298-299..

(32) *Lucien Leuwen*, éd. de Anne-Marie Meininger, Imprimerie nationale, 1982, t. I, p. 384, note b.

(33) J.-P. Callot, *Histoire de l'École polytechnique, op. cit.*, pp. 109-125.

(34) *Lucien Leuwen*, p. 85.

(35) 手稿には « Omar, rédaction du 28 juillet 1835 » とある（Omar は Roma のアナグラム）。*Lucien Leuwen*, p. 85.

(36) *Lucien Leuwen*, p. 93.

(37) *Ibid.*, p. 95.

(38) *Ibid.*, p. 1273, note 13.

(39) Fernand Rude, *Stendhal et la pensée sociale de son temps*, nouvelle édition augmentée, Gérard Monfort, 1983, p. 223.

(40) Antoine Picon, *Les saint-simoniens. Raison, imaginaire et utopie*, Belin, 2002, p.51.

(41) *Ibid.*, p. 60.

(42) *Doctrine de Saint-Simon. Expodition.* Deuxième année, Bureau de l'Organisateur, 1830, p. 3. Cf. *ibid.*, p. 108.

(43) 小杉隆芳「サン・シモンとサン・シモン主義者――サン・シモン学説解議・第一年度の社会思想について――」、『駒澤大学外国語部論集六』、一九七七年、一一一頁。

(44) 同右

(45) *Lucien Leuwen*, p. 713.

(46) 口述筆記された原稿では「ナンシー」となっているが、もとの手稿では「モンヴァリエ」という名になっている。

(47) *Lucien Leuwen*., p. 716.

(48) この叙述を最後に小説は中断され未完のまま終るのだが、スタンダールのプランとしては、このあと、やはり未完のまま終った『ある社会的地位』で扱われたローマの大使館を中心とする物語の展開が予定されていた。ここで「一時的」というのは、任地（小説ではスペインのカペルとされているが、実際にはローマがモデル）での生活までの「ひと時」を意味している。『リュシアン・ルーヴェン』自筆草稿最後の文は、「ついに任地のカペルにつくと、これから会う連中に対してはあの適度な冷淡さ（secheresse convenable）をとらねばならない、と自戒する必要があった。」（*Ibid.*, p. 716）である。

(49) *Doctrine de Saint-Simon, op. cit.*, p. 126.

(50) José-Luis Diaz, « L'artiste en perspective », in *Romantisme*, no 54, 1986, pp. 5-23.

(51) Jules Janin, « Être artiste ! », in *L'Artiste*, 1re série, t. I (1), 1831, p. 9.

(52) Antoine Picon, *op. cit.*, p. 102.

(53) F・A・ハイエク『科学による反革命』佐藤茂行訳、木鐸社、一九七九年、163-164頁。

(54) 同書、第一部参照。

(55) *Doctrine de Saint-Simon, op. cit.*, p. 179.